

権威主義的性格と同居

保坂 稔

— 権威主義的性格研究の展開に向けて —

一 はじめに

権威主義的性格はなぜ生じるのであろうか。吉川徹は、コーン (M. Kohn) の議論を参考にしつつ、青少年 (中学一年から高校三年) の権威主義的伝統主義の形成過程を研究している。吉川の分析では、両親の権威主義的性格や学校教育の管理性が、青少年に権威主義的性格を付与するという (吉川「一九九八・一九一」)。轟亮も、「親子間の『権威主義的性格の』相関関係は、見られるものの予想されるほど大きくはない」(轟「二〇〇〇・二〇八」という事実に着目することによって、「権威主義的態度の差異を主として生み出しているのは学校教育経験」(轟「二〇〇〇・二一〇」)であるとしている。このように権威主義的性格の形成に関する研究は、これまで日本では学校教育の観点から研究されてきている。

また、直井道子は、権威主義的性格の形成要因を「同居」の観点から論じている。直井は、一九七九年から一九八〇年に行われた「職業と人間に関する調査」の有効回答者である二六歳—六五歳の関東七都県在住の有職男性 (有効回答六二九) の妻に対して、さらに「主婦の生活と意識」という調査を一九八二年に行った (有効回答四一八)。そして、「夫の親との同居は、主婦の権威主義的性格の維持あるいは再生産に一定の機能を果たしている」(直井「一九八六・二〇二」という結論を導き出している。

以上の日本における権威主義的性格研究では、しかしながらフランクフルト学派の知見はほとんど参照されていないように思われる。たとえば、「権威主義的パーソナリティ」が、子どもの頃における嫉やコミュニケーションといった親子関係を、権威主義的性格の形成要因として挙げている点に着目した研究はなされていない^[1]。筆者は、権威主義的性格の形成要因につい

キーワード：権威主義的性格 同居

て、『権威主義的パーソナリティ』の知見を生かして探る試みの一環として、日本の権威主義的性格研究に関する再検討を、筆者なりの観点で行っている。本稿は、権威主義的性格の形成要因について、さまざまな観点から検討する試みの一つであり、『権威主義的性格と同居』の關係について言及している。直井の研究は、権威主義的性格と同居の關係について、新たな観点をもたらしたと筆者も高く評価するものである。しかし、その分析は女性に限られている²⁾。男性と女性を調査対象としている『権威主義的パーソナリティ』を念頭に置いて、権威主義的性格の形成要因を検討しようとする過程にあつては、日本の権威主義的性格研究で得られた「同居」の観点を、男性も交えて検討することが必要となるだろう。このような立場に立脚し、本稿では、男性も交えて権威主義的性格と同居の關係について検討することを目的とする。親と同居することは、男性にとつても、権威主義的性格の形成要因となるのだろうか。

今日の時点において、権威主義的性格の形成要因を探ることは、さまざまな意義があると思われる。たとえば、『権威主義的パーソナリティ』は、ナチズムで多く見られるはずの権威主義的性格が、アメリカでも見出せることを指摘することによつて、権威主義的性格が近代一般に内在することを主張している³⁾。実際、筆者が実際にF尺度形式四〇を用いたこれまでの学生意識調査の研究では、『権威主義的パーソナリティ』の平均点(三・八一)よりも高い結果が得られている(四・一八)(保坂

「二〇〇一b」¹⁾。権威主義的性格は、決して過去の問題ではないといえる。それにも拘わらず、前述のように『権威主義的パーソナリティ』における権威主義的性格の形成要因に関する知見はなおざりにされている。本稿では改めて、男性も交えて権威主義的性格と同居の關係を探り、権威主義的性格の形成要因に関する手がかりを考察する。

二 調査の概要

本稿では、「環境・文化・教育に関する生活意識調査」の質問紙によるデータを用いる。この調査は、平成一二年度文部省科学研究費補助金(特別研究員奨励金)によつて二〇〇〇年八月に実施された。調査対象は、東京都の三〇歳以上七〇歳未満の男女有権者個人を母集団として、層化二段無作為抽出法により二四〇〇人をサンプルとして抽出し、郵送法で行つた。有効回答者数は八八八(有効回答率三七・〇%)であつた。東京都にデータ限定したのは、東京が筆者の地元であり、経費や地理の面で調査実施上のメリットがあつたことによる³⁾。権威主義的態度項目については、SSM調査でも用いられ、また吉川が分析の際に用いている六題を利用した。(A)権威ある人々にはつねに敬意を払わなければならない。(B)以前からなされたやり方を守ることが、最上の結果をうむ。(C)子どものしつけで一番大切なことは、両親に対する絶対服従である。(D)目上の人に

は、たとえ正しくないと思っても従わなければならない。(E)伝統や慣習に従ったやり方に疑問を持つ人は結局は問題を引き起こすことになる。(F)この複雑な世の中で何をすべきかを知る唯一の方法は、指導者や専門家に頼ることである。回答は、「そう思う」／「どちらかといえばそう思う」／「どちらでもない」／「どちらかといえばそう思わない」／「そう思わない」の五分位を用いている。尺度化のためには何らかの方法をとる必要がある。吉川は、主成分分析を行い尺度化をしており、本稿も吉川にならつて、以上の項目について主成分分析を施した。結果は、固有値一以上の因子が一つだけ抽出される（寄与率は四八・五％）。以下、第一主成分を尺度として抽出し、因子得点を用いてこの概念を権威主義的態度として数値化し、検討を進めていく。

「同居」に関しては、次の二題で質問している。問Xは自分の親との同居を聞き、問Yは配偶者の親との同居を聞いている。

問X あなたがご両親（実親）の実家から離れてから、再び同居の経験をしたことがありますか。

イ・再び自分の両親（おひとりの場合でも結構です）と数年以上同居している・同居していた

ロ・同居の経験はなく、ずっと別居している・別居していた

問Y あなたの配偶者のご両親との同居のについてお伺いしま

す。

イ・配偶者の両親（おひとりの場合でも結構です）と数年以上同居している・同居していた

ロ・同居の経験はなく、ずっと別居している・別居していた

ワーディングについては、直井論文の記述を参考にした。直井がパス解析を用いて分析をする際には、あらかじめ設定した八つのカテゴリーを用いずに、「夫の親が生存している同居中の主婦」と、「夫の両親とも死亡している同居経験のある主婦」を一つのコードとし、「夫の親が生存しているが別居中の主婦」と、「夫の両親とも死亡している同居経験のない主婦」を一つのコードとしている⁽⁶⁾。本稿は質問紙を用いた調査であり、何よりもシンプルなワーディングが求められるため、「親生存」「親死亡」というカテゴリーを考えないことにした。したがって、質問XYとも、それぞれの選択肢は「〓している・〓していない」と現在形と過去形を問わないものとなっている。

また、直井論文を読む限りでは、「夫の親との同居」といっても夫の母親なのか、夫の父親なのか、あるいは夫の両親なのか不明であった。そこで、本稿調査では「（おひとりの場合でも結構です）」というように付記した。そして、何カ月以上同居すれば同居と見なされるのかについても、特に触れていなかった⁽⁷⁾ので、本稿調査では「数年以上」とした。

三 属性を交えた重回帰分析

権威主義的性格を従属変数とし、属性を交えて重回帰分析を行ったのが、表1である。年齢、教育年数、同居、就業形態、

表1 権威主義的性格と属性の重回帰分析

	男性	女性
年齢	.186 **	
教育年数		-.129 *
経済的ゆとり	.173 **	
実親同居		
配偶者親同居		
自营	.164 *	
常雇		
臨時・パート		
無職		
決定係数	.087 **	.013 *

** p<.01、* p<.05

※1：ステップワイズ法。．1以上を除去。空欄は除去された変数。

※2：就業形態＝ダミー変数。そのカテゴリーであれば1、なければ0。

※3：同居＝1、同居無＝0

表2 就業形態の実数

	男性	女性
自营	92	47
常雇	193	132
臨時	14	116
無職	49	174

「その他」は分析から除外。

表3 親との同居・配偶者の親との同居＊権威主義的性格

	自分の親	配偶者の親
男性	.083	.128 *
女性	.018	.071

(ピアソンの積率相関係数) ※同居＝1
同居無＝0

** p<.01、* p<.05

表4 実親との同居・配偶者の親との同居＊権威主義的性格：年齢で統制

	自分の親	配偶者の親
男性	.076	.020
女性	.027	.019

(ピアソンの積率相関係数) ※同居＝1
同居無＝0

** p<.01、* p<.05、+p<.10

それに「家庭の経済的ゆとり」といった変数を投入してある。「家庭の経済的ゆとり」については、「現在の、あなたのご家庭の生活には、経済的にどの程度ゆとりがありますか」（以下、「経済的ゆとり」という質問で、回答は「かなりゆとりがある」／「多少ゆとりがある」／「中ぐらいい」／「あまりゆとりがない」／「まったくゆとりがない」の五分位で得ている。表1より、「同居」に関する変数は、男性でも女性でも有意になっていない。男性で、最も効果があるのは年齢（正の効果）であり、次いで経済的ゆとり（正の効果）、自営業（正の効果）である。女性で唯一効果があるのは、教育年数（負の効果）である。

ただし、女性のF値の有意水準についてみれば、5%水準で有意ではあるが、決定係数の値が低いので、注意して見る必要があるだろう。そこで、問X・問Yと権威主義的性格の相関関係を、男女別でみてみることにした(表3)。表3から、権威主義的性格と有意な相関関係があるのは、配偶者の親と同居した経験がある男性である。この他のカテゴリーで有意な関係はみられていない。相関分析の結果からも、女性では、権威主義的性格と同居についての有意な関係は得られなかった。

重回帰分析の結果から、男性では権威主義的性格が、年齢から有意な効果を受けているが、同居から有意な効果を受けていないことがいえる。このように考えると、表3で得られている男性でみられた、「配偶者の親との同居」と「権威主義的性格」の有意な相関関係を、年齢で統制する必要があるであろう。同居と権威主義的性格について、年齢で統制した相関分析が表4である。

結果は、表3で見られた「配偶者の親との同居」と「権威主義的性格」の有意な相関関係は、みられなくなった。「配偶者の親との同居」と「権威主義的性格」の関係は、疑似相関関係であることが判明した。

五 おわりに

本稿では、権威主義的性格の形成要因について、同居の観点

から検討してきた。結果は、今日の東京都において、権威主義的性格と同居の関係について何の関係も見出すことができなかった。しかも、女性だけでなく男性についても、権威主義的性格と同居の関係を否定することができた。直井の議論を踏まえるならば、かつては女性が「配偶者の親との同居」をすることは、権威主義的性格の形成要因だった。しかし、本稿では、「親との同居」が権威主義的性格の形成要因になり得ないことが明らかになった。

同居をすることが、今日、権威主義的性格の形成要因とならないことが何故なのか検討することは、今後の課題であろう。たとえば、住居形態の変化や、社会風潮の変化などが考えられる。あるいは、同居をすることが権威主義的性格の形成要因となり得ると肌で考えた人々が、同居を避けたということも考えられる。

「はじめに」でも触れたように、権威主義的性格の得点は、今日なお高い水準にある。このような状況にあって、日本の権威主義的性格研究が見出してきた権威主義的性格と同居についての知見が、以上見てきたように今日その意義を低下しているといえる。このことは、他の観点——たとえば「権威主義的パーソナリティ」が試みているように子どもの躰や親とのコミュニケーション——から権威主義的性格の形成要因を考察することが必要であることを示唆していないだろうか。とりわけ、日本の権威主義的研究でなおざりにされているフランクフルト

学派の観点に注目して検討を進めていくことが重要であると考
えられる。

註

(1) 筆者は、日本ではじめて、『権威主義的パーソナリ
ティ』のこの観点に着目して、「権威主義的性
格」の形成要因を探った(保坂「二〇〇一a」)。「子
どもの頃の父親との会話」は、権威主義的性格を促
進すると同時に、議論を好きになることも促進する
ことが判明した。「羨」の観点などは、今後の課題で
ある。

(2) 直井は、同居の観点ではないが、男性の権威主義
的性格の形成要因についての検討もしている(直井
「一九八八」)。

(3) 「もしファシズムが強力な、あるいは相当大きな社
会運動になれば、それを易々と受け入れそうな物の
見方の持主が(アメリカでも)難なく見つけたせた」
(Adorno: 10)。この引用のみ、訳は曾良中(一九八
三)に従っている。

(4) 値は六点満点。総得点では、上昇しているのにも
拘わらず、日本の権威主義的性格研究では、権威主
義的性格の高得点者が減っている傾向を見出してい
る。おそらく、日本の権威主義的性格研究では、権

威への「従属」にのみ着目した尺度を用いているた
めであると考えられる。

(5) このような筆者の立場は、一九五二年に安田三郎
らが実施した「東京都における社会的成層および社
会意識に関する調査研究」(初期のSSM調査)とほ
ぼ同様の立場である。

(6) 具体的には、「親生存・妻の親と同居」「親生存・
妻の親と別居」「親死亡・妻の親と同居」「親死亡・
妻の親と別居」「親生存・夫の親と同居」「親生存・
夫の親と別居」「親死亡・夫の親と同居」「親死亡・
夫の親と別居」の八カテゴリーである。なお、回答
者本人の親は、「自分の親」もしくは「実親」と表記
する。そして、実親との同居については、その都度
「再同居」とせずに、「同居」とした。

(7) 本稿調査も直井調査も、権威主義的性格尺度とし
て、『権威主義的パーソナリティ』のF尺度の簡約化
を目的とした、コーン尺度を利用していることは同
じである。しかし、コーン尺度の利用の仕方につい
ては異なっている。直井論文では、コーンが用いた
五〇あまりの質問をして、その回答を因子分析し、
その結果得られた第二因子を「権威主義的性格因子」
として尺度化している。第二因子は、一一題の質問
からなっている。一方本稿調査は、五〇題の質問を

するというステップを取らずに、吉川が用いた六題の質問をして、その結果得られた尺度を「権威主義的性格尺度」としている。なおこの六題は、直井が用いた一題のうちの六題と同じワーディングとなっている。

表5 本稿調査と直井調査の比較

	対象年齢	対象地域	調査方法	回収率	サンプリング方法	回答者数	
						男性	女性
本稿調査	30歳～ 69歳	東京都	質問紙	38.0%	層化二段 無作為抽出	373	515
直井論文	26歳～ 71歳	関東 7都県	訪問面接 調査法	80.2%	層化二段 無作為抽出	0	418

表6 同居の実数

	実親	配偶者親
男性	89	47
女性	76	105

(8) 所得収入が家庭の経済的なゆたかさに結びつかないことがある一方で(蓮見「一九八九・九」)、各種世論調査で使われているゆとりに関する質問は、経済的なゆとりとそれ以外のゆとりを混乱している場合がある(蓮見「一九八九・二

三)」。そこで本稿では、「経済的な「ゆとり」という場合には、……最も素直には経済的な豊かさを意味し、したがって、金的・物質的な余裕のある状態を意味する」(蓮見「一九八九・二三)」という蓮見の指摘を踏まえ、「家庭の経済的なゆとり」で聞くことにした。得点の与え方は「かなりゆとりがある」が五点で、「まったくゆとりがない」が一点である。

(9) 同居は権威主義的性格の形成要因とはならないのだろうか。表1より男性にあつて年齢は、権威主義的性格の形成要因となっていることが判明している。その一方で、男性にあつて「配

表7 実親との同居・配偶者の親との同居*年齢

	自分の親	配偶者の親
男性	-.013	.182 **
女性	.046	.139 **

(ピアソンの積率相関係数) *同居=1
同居無=0

** p<.01、* p<.05

偶者の親との同居」と「権威主義的性格」の関係は疑似相関関係であった。年齢が配偶者の親との同居と何らかの関係があることを想定し、同居と年齢についての関係を見たのが表7である。表7より、男女ともに「配偶者親との同居」と「年齢」の正の有意な相関関係が見出された。男性女性ともに、配偶者の親との同居が若くなるほど減っている傾向がうかがえる。

(10) 直井もこの点については今後の課題としている(直井「一九八六・二〇一」)。地域比較などについては機会を改めたい。

参考文献

Adorno, T.; Horkheimer, M. (et al), 1950 *The Authoritarian Personality*, Harper and Brothers. //

一九八〇『権威主義的パーソナリティ』田中義久他訳、青木書店。

蓮見晋彦、一九八九、「ゆとり」と「ゆたかさ」——現代日本人の生活からみて——『ゆとり』、東京大学出版会。

吉川 徹、一九九八、『階層・教育と社会意識の形成』、ミネルヴァ書房。

保坂 稔、二〇〇一a、「政治参加を規定するもの——権

威主義的態度と「議論」——」『年報社会学論集』第一四号、関東社会学会。

——、二〇〇一b、「F尺度形式四〇の現代日本における検証——「環境・文化に関する学生意識調査」を事例として——」『上智大学社会学論集』第二五号。

Kohn, M. 1977 *Class and Conformity*, The University of Chicago Press.

直井道子、一九八四、「老人との同居と主婦の生活行動」、『東京都老人総合研究所。

——、一九八六、「直系家族における主婦の権威主義的性格」『社会学評論』第三七卷二号。

——、一九八八、「職業階層と権威主義的価値意識」『一九八五年社会階層と社会移動全国調査報告書二 階層意識の動態』、一九八五年社会階層と社会移動全国調査委員会編。

曾良中清司、一九八三、『権威主義的人間——現代人の心にひそむファシズム——』、有斐閣。

轟 亮、二〇〇〇、「反権威主義的態度の高まりは何をもたらすのか——政治意識と権威主義的態度——」『日本の階層システム二——公平感と政治意識——』海野道郎編、東京大学出版会。

(上智大学大学院 社会学)